

人道介入、大国の「昔」

書評「Davide Rodogno, 2011、『大量虐殺との対峙—オスマン帝国 (1815-1914年) への人道介入』事例を考察する—」(408頁)

近江啓太*

Humanitarian intervention, the "early modern period" of the great powers

Davide Rodogno. 2011. *Against Massacre: Humanitarian Interventions in the Ottoman Empire, 1815-1914*. Princeton, New Jersey, Princeton University Press. 408 pages. ISBN 9781400840014.

1. 初めに

起床を告げる高らかに鳴り響く軍寮の短巻喇叭（とらんぺつと）の音色のように、人道介入という言葉自体が不義性や非人道性と戦う我々に内在する煌々たる精神や人間の高潔さや気位といった感覚を呼び起こす。人権侵害に対する民主主義の番人は、人類の普遍的価値観の遂行者、また自由主義の伝道師として、国際政治の舞台での自由主義を掲げる大国は、独裁といった統治体制で残虐に権力を振るう為政者に市民が屈服を余儀なくされている多くの国々に介入してきた歴史がある。然しながら、この事実もある側面では、崇高な民主的理念や正義の信念の下、所謂文明国家という列強国々が人道介入という美辞麗句の名の下に、人道介入を利用・悪用してきたという視座も存在する。結果的に、野蛮な国家群に従属という修復不可能な悪循環を齎す社会的・経済的・政治的枷を強いて来た。帝国列強国家は、所謂政治的・経済的に未発達または後進の国々を支配するという事には一切関心が無かったかのように事実をひた隠しにし、国際社会にとって御誂え向きの都合の良い甘美な自由や正義といった無頓着な理想を掲げて来た。

冷戦終結以降、我々は様々なこういった国際的人道介入の例を、バルカン半島のボスニア・ヘルツェゴビナで、東アジアの東ティモールで、アフリカ大陸のシエラレオネで歴史の生き証人として目撃する事となった。同時に、ルワンダで、チェチェンで、チベットで、列強国家の非介入という一見すると理解し難い現実も目の当たりにして来た。ここで重要な問題となるのは、人道介入の正統性を巡る議論は、現在進行中の喫緊の課題であるという事である。国家、取り分け大国は、いつ何時、どういった理由で人道介入するのであろうか。又、どういった理由で非介入という国家的選択を下しているのであろうか。本書の著者ロドグノ博士は、この難解な問いに迫っている。

2. 書籍に就いて

2.1. 内容

本書「大量殺戮との対峙」は、英国と仏国の二つの欧州大国によるオスマン帝国への人道介入の本質に迫る、非常に洗練された繊細な歴史分析の学術書である。ロドグノ博士は、19世紀の人道介入の影に隠れて、欧州列強文明の高慢さが欧州帝国主義をどのように正統化されてきたのかという、挑戦的かつ説得力のある議論を提示する。著者は、自国の政権に虐げられた国民の自由解放の名の下に、欧州列強が隠蔽する偽善と自己欺瞞の重罪を暴露する。

本書籍の主たる目的は、論争を巻き起こす「人道介入」という政治事象に光を当て、類似点・相違点を導き出す事にある。ロドグノ博士は、文明開化を使命と掲げた大国による人道介入は、貪欲で渇くことのない、権力拡大と更なる富の集積を隠匿した単なる欧州帝国主義の騙術（まやかし）に他ならないと論ずる。野蛮と見なされた国々に欧州文明を課する事を渴望していたのが大国であり、大国のこの高慢知己な倫理的優越感が、人道介入の行われた国々を搾取強奪したのだ、と断ずる。欧州帝国主義の飽くなき野望が創り出した文明国と野蛮国という粗雑な二分法に起因した人道介入が、歴史的に遂行されて来たと著者は論ずる。

導入部と終章、そして最初の二つの章（1章、2章）を除けば、各章は同様の形式で論じられている。3章ギリシャ、4章レバノンとシリア、5章クレタ島第一次介入、9章クレタ島第二次介入、10章マセドニア地方、これらの章は介入の事例を分析し、6章ブルガリア、8章1890年代に起こったアルメリア人の大虐殺の章に関しては非介入の事例として扱っている。繰り返しの強調になるが、本書は、何時、何故国家は介入し、時として何故介入しないのかという問いに焦点を当てている。

著書の主張と歴史分析による研究結果は二つの要素を持ち合わせている。詰まり、19世紀と20世紀に置ける人道介

* アメダバード大学芸術科学学院・社会科学部助教授。

入の事例に類似点・相違点がそれぞれ見受けられる事である。先ず初めに、類似点に関して言えば、介入する側の国家は、征服支配する目的を巧妙に偽装し、欧州の倫理的優位性を根拠無く振り翳し、人道介入の帰結に全くもって無関心であったという事実。次に、相違点に関して言えば、欧州キリスト教の狡猾な趣旨選択に基づいて人道非介入が政策選択されて来たという紛れもない事実。大量殺戮から救済されなければならなかった、又はそれに値した人々は、当然の事として、18世紀の自由主義の哲学や政治に予め寄与していた人々のみであった。ロドグノ博士は、それ故人道介入の政治的起源を検証する研究の重要性を主張し、次のように結論付ける。人権擁護を目的とした人道介入という表面上の言葉の意味だけが変化し、根底にある政治力学やその仕組みは何百年という年月が経過したとしても、根本的には変わっていない。そして躊躇無く、これら人道介入は大国による茶番劇であり、詐欺であると国連の権威を堂々と放棄するべきである。本書の中では、「国際社会はウェストファリア条約体制から、未だもって抜け出せずにいる。それ故、国家主権という解消しなければならない理念ですら、克服出来ず、普遍的価値や基本理念又は新秩序政治体制の創造による産物に基づくものでもなく、人道介入は未だ合法化すらされず、正統性をも確立していない」(Rodogno, 2011, p.275)と、実際このように言及している。我々が追求する自由や正義といった普遍的価値は幻想に過ぎず、混沌とした現代に真に取り組まなければならない国際問題とは、誰の為の自由であり誰の為の正義か、といった問いである。人道支援介入の今現在の行動範例、又はその枠組みは一見すると19世紀の人道介入とは様相を異にしている訳では無い。

2.2. 良点

本書の良点は、著者が戦争犯罪や人道に関する犯罪、集団虐殺での民族浄化といった人道介入における用語に関して例外的な迄に細かい気配りをしている点が挙げられる。これら人道介入に関する重要語句に関して感受性を高める事で、19世紀の仏国同様英国では、過剰な感情主義を暗示する否定的な意味を持っていたのが人道的、人道主義という言葉であったという重要な発見を著者が齎した事が挙げられる。異なる文献を丹念に精査する事で可能とした、人道介入という言葉の持つ意味を積極的に歴史的に分析解釈した研究者の試みが、ロドグノ博士を人道介入という言葉の概念自体が持つ複雑な次元性・両義性・矛盾点等の発見、そして欧州大国によって実際に政治政策へと実行に移された人道介入の実践における多元性・曖昧さ・矛盾点の発見へと導いているようにも思える。こういった積極的な解釈学の方法論無しには、彼の研究成果は生まれなかったであろう。又、この方法論自体が、他の学術書と比較した際にも、その価値を際立たせるものでもある。

2.3. 難点と代案

一方で、本書の難点として一つ残された問題がある。研究の作法として、解釈学の方法論自体に起因するのかもしれないが、

結論ありきの議論形成・展開に陥ってしまっている点である。これは研究命題の二つの想定条件に関わるものであり、著者が研究の初期の段階から一貫しているものである。第一の理論想定として、人道介入の起源は、東方問題として広く知られている欧州列強とオスマン帝国との特別な関係性に由来するといった固定観念的図式である。著者が設定している第二の理論想定は、政府又は国家は、認識し得る国益に基づいて常に行動するといった正否を問わない歴史的脈脈を欠いた画一的な国家概念の論理を大前提としている。それ故、人道介入自体が各国の利益に呼応するように決定が下されるといった論理の飛躍と一貫した実証的議論展開の欠落を指摘せざるを得ない。主となる国家の行動動機自体が、他の介入と人道介入を決定的に分けるものであるとし、それが大量殺戮から見知らぬ諸国家を救済する結果となり、本文では「人道介入は非常に恣意的で選択的で、非常に偏見に満ち溢れている。」(Rodogno, 2011, p.9)と本書では明確に述べられている。

これは著者自身が取り上げた事例が、彼の議論を例証する場合のみを取り上げただけの研究で終わってしまい、研究の初期段階で持っていた著者自身の主観や直感を例証したに過ぎないと批判を浴びる可能性は拭い切れない。満更全てを否定する気は無いが、これは歴史家が陥る典型的な過ち、又は歴史家のそもそもの研究方法であるのかもしれない。改善点を挙げるとすれば、こういった理論から導き出した著者の想定事項も、そもそも固定化させて歴史検討する必要があったのだろうか。私自身の見解は、「否」である。寧ろ、著者は研究自体が人道介入という言葉自体の持つ政治的歴史的背景を、解釈学兼現象学的態度で、探求した点を強調すべきだったのではなからうか。著者は寧ろ学術研究以上の興味を創作したといっても良い。この点を博士が如何に解釈したのかは、この重大な点についての描写が存在しない故、評者の私には判断し兼ねるが、歴史学の作法を社会科学の作法として照らし合わせると、何か不自然な点がありはしないだろうか。

突き詰めて言えば、条理整然と仮説に符合する事例を発見する事のみを目的とするだけでなく、大分手古摺るが、帰納でも演繹でもないアブダクティブという論理の推論法用いた事、意味形成の成立を追求していた事に比重を置くべきであった様に感じられる。その他の学術研究の研究手法の細かい点については、一々反証を挙げて説明をしたりする事は避ける。それはこれらの批評によって鋭敏なる読者自身が、様々な学術作法や研究手法を学ばれる事を推奨するからである。

以上、私は所謂評者なりの評釈を残らず列挙した。これら批判点に対して解決の鍵を与えて呉れたのは、解釈主義という研究手法を唱える先鋭的な研究方法論の分野の存在であった。私自身、偶然の発見と大学院教育での恩師達との出逢いから出発した、比較的新しい研究手法の分野である。単なる推測を以て、この陳述を思い立った私は無謀者ではない。これら分野に関して、読者を喚起する目的の為に、この書評論文を寄せた私の副次的意図も汲み取って頂ければ幸いである。

3. 小括

繰り返しになるが、著者の根本的な問いは、どう言った状況で国際的な意味を持つ人道介入という概念が一般には理解され、十九世紀の帝国主義の渦中で国際政治の舞台で実際にはどのような状況下で人道介入が行使されて来たのか、又は行使されて来なかったのかを問いている。ロドグノ博士は欧州列強が人間性の寄与発展を真に願ひ、人権擁護の観点から力学政治、地政学政治の既存の理解の枠を超えて、真に人道介入を行っていたのか、その間の答えを模索した。所がその実は、大量殺戮に異を唱えた欧州の人道介入は、未だ残虐性を保持し、帝国主義の二枚舌外交が現実であったというのが著者の主張である。有史以来如何なる時も帝国の戦場での雄叫びが鳴り響き、勝利を高々と宣言している、と恰も著者は告げているかのようだ。そして本書は、西洋の高慢な文明の優位性に呼応した帝国主義の熱狂と不可分出会ったのが人道介入なのだ例証している。欧米中心からの視点に距離を置き、問題を外部に対して公平な視点を提供している事で非常に有益な書である。

4. 終わりに

私はロドグノ博士に対して何ら厭忌(えんき)を有する者でも無ければ、歴史学を否定する社会学者でもない。本書を通して博士が解き明かした謎に敬服している一人の政治学者に過ぎない。が、提起した評論点に於いては、評者の当然の義務としてこの挙に出たまでであり、この点について誤解の無いように願うばかりである。歴史家を最大限擁護するのか、その鎮座を解放するのか、一言で述べれば、全て瑕疵(かし)である。全てが、雑情報を含み理論の正否は苦笑を禁じ得ない。その瑕疵と雑情報の中に、研究者が何ものかを発見し、幻想や疑念を抱きつつ、真実の追及から逸脱する一見無価値な探究的な研究であったと

しても、一驚を喫する真理の発見に寄与する事がある、と明瞭に記述して本稿を閉じる。

受理 2021年6月4日
校了 2021年6月30日
掲載可 2021年7月15日

謝辞

発刊にあたり、多くの方のお世話になった。『麗澤経済研究』の編集委員のラウシン・イー教授、熊野留理子教授、上村昌司教授、寺本佳苗教授、山下美樹教授、査読委員、そして対応して頂いた杉浦滋子教授(麗澤大学言語研究センター長)、麗澤大学事務局の教務・教育企画室主任の丸優泰氏に対して、この場を借りて感謝の意を申し上げる。

参考文献

- 江戸川乱歩(2012)『一枚の切符』青空文庫。
大月康弘(1996)「イスタンブールのギリシア人—ギリシア・トルコ関係の中の少数集団—」『一橋論叢』、第116巻4号、pp. 689-707。
高木智章(2016)「メディア・ナショナリズムに関する考察—そのアンビバレンス、限界と可能性について—」『慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』、第66号、pp. 107-121。
田村哲樹(2015)「民主的家族の探求—方法論的ナショナリズムのもう一つの超え方—」『法政論集』、第262号、pp. 15-37。
水原俊博(2016)「多文化主義の規定要因の実証分析—松本市日本国籍住民調査(2014)のデータ分析を中心に—」『地域ブランド研究』、第11号、pp. 15-26。
村田(澤柳)奈々(2011)「バルカンの国民国家形成とギリシア人コミュニティの再編：テッサリアにおける難民定住と土地分配をめぐるギリシア議会の取り組み(1906-1907年)」『日本中東学会年報』、第26巻2号、pp. 151-184。

執筆者紹介

近江啓太(おうみけいた) アメダバード大学芸術科学学院社会科学部助教授。インド北西部にあるグジャラート州で、国際関係学・比較政治学・社会科学分析方法論に関する科目を担当し、米国の政府機密と国政術に関する研究に従事。米国中西部ユタ大学政治科学部より2021年12月博士号取得。2005年麗澤大学国際経済学部卒。

Humanitarian intervention, the "early modern period" of the great powers

Keita Omi

Book Review

Davide Rodogno. 2011. *Against Massacre: Humanitarian Interventions in the Ottoman Empire, 1815-1914*. Princeton, New Jersey, Princeton University Press. 408 pages. ISBN 9781400840014.

Summary

Analysis of humanitarian interventions tends to gravitate toward policy effectiveness in the name of justice and democracy, but they are imbued with the politics of Great Powers. For centuries, military operations and economic aids for citizens in oppressed societies have been the most persistent means by which economically wealthy and politically strong states have responded to human rights crises. This article reviews published research conducted by Davide Rodogno on humanitarian interventions. The author argues that the European Powers' decisions for interventions or non-interventions in the Ottoman Empire illustrate that inconsistent efforts of Great Powers' interventions are hypocritical and self-deceptive of their lust for insatiable greed of power and world dominance. This essay introduces a cursory glance of Rodogno's published book to readers and present my assessment of his research. In the essay, I call attention to the usefulness of interpretive research methodology as a method of inquiry to a normative claim-making since pundits, like me, and scholars alike must lay much of the knowledge production and be open to methodological pluralism.